八戸市立 **市川中学校 学校だより「じょ」**

平成26年9月18日(木)
校長通心 No.31 校長 馬渡教二

ヒューマン・スペース論 （吉野 弘）

バスの運転手が運転台に着くと
バスの運転手は四角なバスである
彼は彼の内部に客をのせて走る
彼は運ぶべき空間をもつ故に
その大きさまで彼自身が拡大するのだ
内部に配慮をみなぎらせ
外部への目覚めた皮膚をもち
荷電体のように走る彼
だからして彼は彼の内部の乗客たちの
いつに変わらぬ空間感覚のにぶさ
空間を合理的に使えない雑踏ぶりが
耐え難くカンにさわるのだ
乗客諸君
バスを運転してみろとは言わぬ
君自身を運転してみろ
肩幅がわかる筈だ
胸の厚みと背中の在りかがわかる筈だ
いやその前に
君自身を満たしてみろ君の配慮で
外への目覚めた皮膚が出来るまで
君が君自身を配慮で満たすなら
町を地球をもちろんバスを
同じく君の配慮で満たす筈
そこまで君自身を拡大したことがあるか
君自身を満たしたのと同じ原理で……
他人の胸の厚みを
君自身の胸の厚みを感じるように
他人の運命を君自身の運命と感じるように
君及び他人を
空間として感じたことがあったか
もし感じたことがあるならば
君の空間を他人の空間に対置し
共に時間の虚無の中に
愛で包んで帆を添えてそっと置くだろう
このことがわかれば
バスの運転手とも話しが通じるのだが……

「武の車輪」フル回転！（秋季大会カップ3個）…そして「文の車輪」を回す番（3次考査週間）

秋季大会が終了した。終わってみれば、野球・ソフトテニス女子・卓球女子の優勝！！ソフトボールの2位、剣道男子の3位、個人種目でも陸上競技・ソフトテニス女子・卓球女子から県大会出場者が15名と素晴らしい活躍をみせてくれた。3日目の野球の応援には3年生も駆けつけてくれての全校応援で市川中が一つになって「武の車輪」をフルに回転させることができた。…そして、いよいよ明日からは3次考査週間へ突入である。「文武両輪＆絆のシャフト」を目指すみんなは、もちろん3次考査バージョンに切り替え、「文の車輪」を力いっぱい回す時である。

農林水産省の林業試験場が100匹の猫がどのぐらいネズミをとるのか実験したそうである。その結果、本気でネズミを捕る猫は6％、気が向けば捕らえる猫が31％すなわち100匹のうち37匹しかネズミを捕らず、残りの63匹の猫は全くネズミを補食しないことがわかったそうである。この結果は、飼い猫の食生活が関係しているらしく、20年～30年も昔の飼い猫は残飯に煮干しや味噌汁をぶっかけた餌、（通称「猫まんま」とよんでいる）いわゆる粗食しか食べられなかった。肉食動物の猫にとって、これだけでは、動物性タンパク質が不足するため、ネズミを捕らえることで不足する動物性タンパク質を補っていたと考えられる。その頃の猫族は両親の涙ぐましい努力と教育によって、ネズミ捕りの技術を身につけていたであろうと推測される。きっと、父猫がネズミを捕らえて母猫に渡す。母猫はそのネズミを弱らせ、子猫に食べさせる。息の根の絶えていないネズミを初めて見た子猫は、びびりながらもそれを食し、それが代々猫族の社会に受け継がれていったはずなのである。

ところが、人間社会の豊かな食生活の余りもののおかげと、栄養満点のペットフードのおかげで、糖尿病になるネコすらあらわれるようになってきた。つまりは、猫族の社会にハングリー精神（飢餓感）がなくなったのである。だからネズミを捕食する面倒なことをする必要がなくなった。必要がなくなると、ネズミを捕る技術を忘れてしまう。というよりも、教えられてこないのだから知らないのである。さらに父猫と母猫の役割までが変化し、猫族の家族のあり方まで変化してきてるらしいのだ。もしかしたら、人間社会にもこの現象があらわれてきているのかも……。

さて、本題に入ろう。**猫をネズミ捕りの学習に向かわせたのは「ハングリー精神（飢餓感）」**であった。たぶん、人間を学習に向かわせるのも「文化的な飢餓感」と考えてもいいと思う。奈良時代、日本に仏教を伝えようと何回も航海に失敗し、視力を失ってまでも来朝した鑑真は、お金のためでも名誉のためでもなく、ただひたすら当時の日本人の燃えるような中国仏教への飢餓感に応えようとした人で知られているし、かつてギリシャの哲学者であった「ソクラテス」は人間にとって一番大切なことは「自分は無知であることを知ることだ」と言った。本当のことを自分はまだ知らないという自覚→**「無知の知」に達すれば、本当の知・真理を追求しようという意欲を持つ**に違いないという考え方であった。

2学期の始業式に「世界の果ての通学路」という映画の話をしたのを覚えているだろうか？危険な野生動物のいるサバンナ（15kmの道のり）を2時間かけて妹と学校に通うケニアの子。アンデス山脈の岩山（18km）を1時間半かけて馬に乗って通うアルゼンチンの子。片道22kmを4時間かけて歩くモロッコの女の子。足に障害のある兄を車いすに乗せて4kmの道のりを1時間15分かけて学校へ通う二人の弟たち。この子たちは**自分の親の世代と違って勉強できる時代に生まれてきたことを「幸運だ！」と身にしみて感じているから、学ぶことにエネルギッシュでモチベーションが高くてキラキラ輝いている。**この子たちにとって、学校で勉強することは、「自分の将来を切り拓くためのパスポート」を得ることと同じなんだと思う。学校までの道のりがどんなに険しくても、学べるという喜びと夢を抱き何十キロもある通学路をただひたすら歩き続ける子どもたちを見て胸が熱くなった……。

いよいよ3次考査週間である。二刀流でおなじみの剣豪宮本武蔵は「すべての剣の道で昔からのこのやり方さえすれば絶対に勝てるとか、今はこっちの方が絶対に勝てるという、そんな方法は一切ない。**誰のまねもしない自分だけのやり方を学びなさい**」と言った。まるで、自分に最も効果のあるテスト勉強方法をしっかり身につけているか？と言っているように思えるけれど、ネコ族、ソクラテス、世界の果ての通学路のようなハングリーなテスト週間、モチベーションの高いテスト週間が「文の車輪」の勢いを左右するカギを握っているのは間違いない！！精いっぱい通過したい！！